荀風全集

第一卷

岩波書店

昭和三十八年七月八日　印刷
昭和三十八年七月十二日　發行

荷風全集第一卷
定價六百圓

著者　永井壯吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 第八回配本　精興社印刷　牧製本

目次

おぼろ夜……一
烟鬼……一五
花籠……三
かたわれ月……三九
濁りそめ……四七
三重襷……五七
薄衣……七五
夕せみ……一二九
をさめ髪……一四九
うら庭……一八三

闇の夜……一九一
花ちる夜……二〇七
四畳半……二四九
青簾……二六五
小夜千鳥……二七三
山谷菅垣……三〇一
櫻の水……三一九
新梅ごよみ……三二九
いちごの實……四二三
野心……四三一
後記……五一五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おぼろ夜

春ながら、朝は未だ肌寒い十時頃である。糸の様なる春雨の一時止まうとして、又蕭索と降籠めた新道から、大通へ出やうとする角の、風呂屋の格子戸を戞然と開けて、今麿き立ての顔美しく、連立つて立出た二個の藝者がある。

「まだ、降つてるんだよ。」と、片手に白粉下なるべき小さい瓶と、石鹸の箱を手拭に包括んだのを持ち、立出さまに無造作に澁蛇目傘を開いて、切長の劍を持つた眼に、鳥渡空模様を打仰いだ一個は、鴨脚返の鬢を引詰めて、作つた様な富士額の額狹く、濃い眉毛の端の上つて居る上に、口元思ふさま締つて、つんとした鼻の高い、何處やら勝氣らしく見える細面である。年頃は最う二十二三、古びた糸織茶辨慶の寢衣に、三ツ扇の一つ紋を付けた黑縮緬の羽織を蔽ひ、黑天鵞絨に赤い一本獨鈷の鼻緒を嵌げた高下駄を穿いて居る。

他の一人も矢張同じ年頃で、潰島田に牡丹色の結綿を掛けて居るが、小作りの豐艶とした愛嬌一方の女だけに、左程不似合でもなく、一寸見には却て若々と愛くるしく見られる。

「花ちやん、本統に能く降るぢや無いかねえ。人の氣も知らないで……。」と、引詰鴨脚は投出した様な語調で、潰髷を見返つた。

「太陽様に愚痴を云ったって爲様が無いやね。」と、潰髷の花助は連立って新道を歩みながら、「駒ちゃん。お前さん、今日は餘程甚麼か爲てお居でだねえ。何處か、身躰でも悪いんぢゃ無いかい。」

「顔色でも悪いかい。」

「別に、其程ぢゃ無いけれども。今日は何だか、何時に無く鬱いでお居での様だから……。」

「花ちゃん。實はね、最う世の中が可厭に成ったちゃったんだよ。」と、引詰の駒次は太息を吐いた。

「何だね、突如に、……世の中が可厭になったちゃったゞなんて。又親方と喧嘩でもお爲なんだらう。本統に餘り仲が好過ぎるからなんだよ。」

「ほゝ。」と、駒次は淋しく笑った。「其様事なら可んだけれども、本統に私や、困ッ了った事が出來たんだからさ。」

又溜息をするのを、花助は打見遣って、「駒ちゃん、可厭だよ。又私を欺んぢゃ無いかい。」

「花ちゃん、眞實なんだよ。」と、如何にも眞面目で、「本統に、種々話し度い事もあるんだから、一緒に鳥渡寄ってッてお呉れな。」

「あゝ。其ぢゃあ……。」と、花助も今は氣遣しげに駒次の顔を見た。

兩個は新道の端れの、武藏屋駒次と軒燈を出した格子先へ來たので、

「さア、花ちゃん。」と、駒次はイんだ。

「御免……。」と、云つて、花助は先へ這入る。

駒次は傘を土間の隅へ抛遣りながら、縁起棚の前に唐紙と直角に置いてある長火鉢の傍に、崩れる様に坐つて、先づ續けざまに長煙管で、煙草を吸ひ始めたが、急に何か思出した風で、勝手の方を顧ながら、下女のお清を呼んだ。

「清や。御苦勞だけれどもね、鳥渡あの魚鐵へ行つて、何かお酒のお肴をね、大急ぎで誂へて來てお呉れな。」

「あら駒ちゃん。私になら其様事を……。」と、花助は制しやうと爲た時、お清は早や下駄を穿き掛けて居る。

「花ちゃん、緩寛してツても可んだらう。」

「別に用ツちや無いけれども……。」

「其なら可いやね。」と、駒次は茶棚の上にあつた正宗の瓶詰を、沸ぎる鐵瓶の中へ入れて、

「花ちゃん、お交際してお呉れよ。お酒でも飲まなくつちや、何だか氣がくさ〳〵爲了ツて……。」

「駒ちゃん、今日は餘程甚麼かお爲だよ。平素のお前さんにも似合はない。」と、日頃姉妹の様にして居る花助も、駒次が呑氣と云はるゝに似ぬ今日の様子に、如何にも合點の行かぬ風で、眤と其顏を打目戍つて居る。

駒次は鬢の後毛の垂掛かるのを、さも煩さゝうに撫上げて居たが、ふと氣着いて正宗の好き程に燗付きたるを取出して、「さア、花ちゃん。何にも無いけども……お清は何を愚圖々々して居るんだらうね。」と、茶棚から酒杯を取る。

「朝ッ腹から、本統に濟まないねえ。」

「花ちゃん、遠慮お爲で無いよ。お酒でも無くッちゃア、本統に……。」

「だけれども、自暴酒は毒だから、餘りお飲みで無いが可いよ。」

「毒だつて……。」

「まア、那麼云はないでさ。」と、花助は穏かに、「先刻、お前さんがお云ひの事をさ——何を其様に煩焦れてお居でなのか、私だつてお前さんの意中を聞かない中は、何だか氣が沈着かなくつて不可いんだからさ。」

「別にね、此ツてお前さんに心配を掛る事ぢや無いんだけれどもね、實は……。」と、云淀んだ駒次は、沸ぎる鐵瓶の蒸氣を避ける様に、顔を斜にして、「實はね二三日前に阿母様が尋ねて來て……。」

「阿母様が……。お前さん先に阿母様も阿父様も居ないんだつてお云ひぢや無いか。」と、又も合點の行かぬ顔付を爲た時、お清が歸つて來た。

「只今、直に……。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「清や、お誂の來る中、何か烏渡、お香物でも出してお呉れ。」と、駒次は酒杯を花助に差して酌をする。

「はア、有難う。」

駒次は手酌の一口に輕く舌打して、「花ちゃん。お前さんにや……お前さんばかりぢゃア無いんだよ。誰に訊かれたつて、皆最う、兩親とも死了つたんだつて、那麼云つて居たのだけれども、實はね、今年で最十年ばかり音沙汰の無かつた母様が、不意と家へ尋ねて來てね……。」

「まア、嘸懷しかつたゞらうねえ。」

「其ア……懷しい事は懷しかつたけれども。」と、ぐいと酒杯を干して呼吸を吹き、「實はね、花ちゃん。其事で……母様の事で、本統に困つた事が出來たんだよ。」

「甚麼事でさ。」

「甚麼事ツて……最う私や、事によるとお前さんにも、親方にも、別れなくつちゃア成らないかも知れないんだよ。」

「えツ。甚麼して……。」と、花助は眼を圓るく爲せた。

「あの、花ちゃん。先這麼云ふ譯なんだよ。」と、花助の酒杯へ酌をし、自分も又ぐつと一口咽喉を濕ませて、「阿母様たつて、本統に、つい二三日前に家を尋ねて來る迄、最う丁度十年近くも——

私が始めて敷寄屋町へ半玉に出てからと云ふもの、本統に風の音信も無しで居たんだから、お互に逢つて見れば、懐しいと思はない事は無いけれども、今迄の……死んだ姉さんの事なんぞを考へると、何程親だからつて、阿爺様も阿母様も、揃ひも揃つて餘り薄情な擧動ばかりで、私や甚麽したのか、最う何と無く親身の様な心持が爲なくなるんだよ。」

「魚鐵で御在。」と、男が貝の醋物を持つて來た。

「花ちやん。私や母様を見ると懐しい様だけれども、又本統に憎くらしい様な氣もするんだよ。一概に那麽云ふと、餘り親不孝で勿體無いやうだけれどもね。」と、駒次は花助も共に酢貝の皿へ箸を付けながら、「私や眞實、阿爺様や阿母様を怨んだ事は、本統に最う今迄に何遍だつたか知れや爲ないからね。阿爺様と云ふのは、今ぢや顏も明瞭覺えて居ない位なんだけれども、何でも相場で財產を損了つたとかで、私は未だ年が行かなかつたもんだから、半玉に賣られるし、姉さんは吉原の大籬へ勤に出る様になつてね。然して三年で年が明ける姉さんを、間も無く又三年々期を增したツきり、其お金を持つて、阿父様も阿母様も其なり姿を隱し了つてさ。二三日前迄と云ふ者は全然音沙汰無しで、何處を甚麽してお居でなすつたんだか。姉さんは其後、私が丁度一本に成らうと云ふ時分、病氣で到頭吉原の病院で、お死亡になツ了つたんだけれども、阿父様も阿母様も行衞が知れず、私が甚麽爲様ツたつて未だ抱えの身だつたし、其に又主人てのが、大の薄情者と來てゐたんで、

本統に甚麼する事も出來なくなツて、私ア最う那樣悲しかつた事は無かつたよ。其でもねえ、漸と吉原の御内所で、可哀想だつて悉皆お葬式迄出して呉れて、まア小ぽけなお墓だけど、箕輪の淨閑寺へね……。私や今でも毎月御命日には、お花を上げに行くんだけれども、姉さんの其時のお心持を考へると、私や本統に阿父樣や阿母樣が憎くらしくつて世人は能く親の心子知らずつて云ふ事を話してるけれども、家の阿父樣や阿母樣の樣な鬼みた樣な心の親も有るものかと思つてさ。其からと云ふものは、姉さんの事を考へる度々に、私や阿父樣や阿母樣が憎くらしくつて、今だに……逢つて口を交いてもね、未だ何だか親身の樣な氣が爲ないんだよ。」

花助は駒次へ酒杯を差した。駒次は一息に干して直に返杯し、「其だから、私や其の後は、お前さんも知つてお居での通り、年期があけてから、數寄屋で自前で出て居たけれども、些細い行掛から此方へ來て、最う半年ばかりになるんだが、姉さんが死亡つてから、私や最う、何も彼も自暴になつ了つて、好いお客と見たつて、甚麼爲やうつて云ふんぢや無し、可厭なお客なら、坐敷からづんづん歸つて來了ふ代にや、私や自分で、お坐敷の取持が出來なかつたとか、お客が心持でも惡く爲たとか思へば、戴いた御祝儀でも返却して來るのが、結句今ぢや、氣性者だとか、呑氣藝者だとか云はれてさ。相應に先這麼やつて暮して行けて見れば、甚麼せ最一遍濁水に陷つた身だもの、爲度い事を爲て、お金で自由にならない代に、今の親方見たやうに……ほゝほ。心底ね、眞實を打明け

られゝば、其ア女の私だもの。お互に面白可笑しく暮してツた方が、奥様だの、やれ何だのつて、七六ケ敷爲て居るよりか……ねえ、花ちやん。」

駒次は早微醉の色付いた眼元に、花助を見遣つて、「花ちやん。まア、最う一杯……。」と、拒むのを無理に、一杯を勸め置き、「それをね、花ちやん。死んだのかと思つた位な阿母様が、途惚た時分に忽然家へ尋ねて來てさ。先這麽云ふんだよ。以前はね、家も相塲で度々失敗つて、東京にも居られなくなつて、七年ばかり後に支那とかへ行つて、まア夫婦共稼に働いてゐる處へ、又巧く金持の支那人に取入つて今ぢや神戸でね、支那で出來る帶地や何かを商賣する大きな店を持つて、何一つ不自由なしに暮せる樣になつて見れば、昔賣つた娘抔の事も想出されて、今も嘸怨んで居る事だらうから、攻て家へ引取つて樂を爲せて遣度し、又店の一つも持つてる身分になれば、娘が女郎や藝者を爲て居ると云はれちや、人に知れても面目が無いから是非堅氣になつて、神戸の家へ歸つて呉れつて云ふんだよ。其だけれどもね、私や、お前さんも知つての通、自分が一度恁うと思つたら、人の云ふ事なんか聽かれない性分だしね、最う一遍浮氣勤を爲た身躰でさ、其も十七とか十八とか……未だ末の長い年頃ならまだしも、最う這麽好い年をして家へ歸つた處で、今さら嫁にも行けたもんぢや無し、又死んだ姉さんの事を考へたつてもさ、此から自分一人のう〳〵と家へ歸つて、樂を爲樣つて事も出來ないからねえ。私や、甚麽爲樣かと思つて……一通は母樣にも斷つて見たんだ

けれども、昨日も一昨日も毎日の様に來ちやア、歸つて吳れつて云はれるんでね。」と、自ら心の煩悶を打消さうとてか、手酌に又も二杯を續けて、其を花助に差した。

「ねえ、花ちやん。堅氣になつた所で面白くも無い。其よりか一生惚れた腫れたで、散々腹騷ぎ散らしてさ、お酒と心中でも爲た方が、何程增しだか知れや爲ないやね。」

「其ア那麼だけどもね、まア駒ちやん……。」と、花助は初めて酒に濕へる唇を開いて、「お前さんの云ふのも無理は無いけれどもね、又阿母樣や阿父樣のお心も些少は察して上げるが好いよ。何も惡氣でお前さんを連れて行かうつて云ふんぢや無し……歷然とした立派な店を持つ樣な方にお成なら、全くお前さんが浮氣勤を爲てお居でぢやアね、其ア世間の手前もあるだらうからね、お前さんも先熟くお考への方が可よ。」

「其ア、私だつて滿更親の身を考へ無いんぢや無いけどもさ、私が別に堅氣にならずとも、何も親不孝に當ると云ふ譯もなからうと思ふよ。ねえ、花ちやん。原々親の爲に汚した身躰なんだから、今となつて親が足を洗つて吳たからつて、其で親が子を賣つた自分の耻を全然洗つ了ふつて云ふ譯にも行きやア爲ないやね。だから私だつて、私が好きな樣に、此儘浮氣な商賣を爲て居たつて、親は遠い神戸に居るんだつて云ふしさ、廣い世の中だもの、別に其が親の耻にもなりも爲まいし、又何にも親不孝つて云ふ事もないと思ふよ。」

「其ぢやア、お前さんは甚麼しても、此儘家へ歸らずに居様つて云ふんだね。」

「あゝ。私や……。」と、駒次は飲殘の酒杯を干し、又重ねやうとしたが、一合瓶の正宗は早や空しくならうと爲て居るので、やをら身を起して又一合瓶を燗しながら、「私は最う些し、此儘氣儘に暮して居たいんだよ。家へ歸つちやアね、最う親方とも逢へなくなるし……親方が田舍へ行つても暮して行ける家業なら又話も出來やうけれども、家業が家業で、東京で無くつちやア成らないんだからね。阿父様や阿母様の方ぢや、私を傍に置いて肩でも揉まし度いとか、世話を見て貰ひたいとか仰有るんだらうけれども、又私だつて、何方かつて云へば、今迄家の爲に隨分苦勞もしたし、可厭な思も爲たんだからね。まア、當分は這麼して、東京に居たい考へなのさ。」

春雨は漸くに止んだやうであるが、天は猶一面に薄黑い雲に蔽はれて、寒い風さへ吹出したのである。何時も來る煑豆屋の鈴の音は、幽に向横町の見番の方から聞え初めて、隣家には抱子の浚ふと覺ゆる甲高な艶いた聲が、三味線の音と共に、寂とした雨晴りの板新道を渡つて行つた。

* * * * * * * * * *

「今見番へ行つて箱屋さんに聞きましたらね。今夜も時間過ぎで無くつちやアお歸になれませんさうで……。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com